

問7:13世紀から16世紀にかけてのラテン語 聖書の校訂について

松山 和弘

2014 年 11 月 15 日

1 ラテン語聖書の校訂の困難さ

13世紀から16世紀にかけてのラテン語聖書の校訂について、主にカトリック教会側の視点で述べることにする。

旧約聖書はヘブライ語で、新約聖書はギリシア語で書かれている。

聖書の翻訳の正しさを確認するためには、ギリシア語、ヘブライ語を読む必要がある。

中世ヨーロッパでは、ギリシア語を読める人が少なかったことや、ラテン語聖書を改訂すること自体に抵抗があったため、ラテン語聖書の翻訳をやり直し校訂を行うのは、16世紀に入ってからとなった。

ここに、中世ヨーロッパのギリシア語圏やヘブライ語話者であるユダヤ教徒とのコミュニケーション断絶の根深さを感じる。

2 ラテン語聖書間の照合による聖書の校訂

カロリング朝ルネサンスにおけるアルクインらの校訂(796年)13世紀にパリ大学による改訂が行われたが、これは複数あるラテン語聖書の間で照合が行われたのであって、ギリシア語、ヘブライ語からの再翻訳ではないといわれている。あくまで、写本間に差違がでてしまったラテン語聖書を、元に戻すことを目的としていたといわれている。

ただし、全くギリシア語、ヘブライ語聖書を全く参照しなかったかどうかは、検証を要するかもしれない。

3 トマス・モアの「オックスフォードの書簡」

トマス・モアの1510年台の書簡に、イングランドの大学での人文主義改革に関するものがある。当時、神学でのギリシア語、ヘブライ語教育の不要論

があった。トマス・モアは、不要論者への批判を行なっている。16 世紀のイングランドで、神学教育でのギリシア語、ヘブライ語不要論があることには驚く。

4 トリエント公会議

カトリック教会は、1546 年の公会議にて、ウルガタ訳を正典に定め、正典のリストを公式に定めた。

この時まで、カトリック教会は聖書の正典の範囲を公式に示していないこととなる。ここからも、カトリック教会の聖書重視の度合いがプロテスタントとは異なることがわかる。

また、トリエント公会議にて、公式にウルガタ訳の校訂を決定した。

5 クレメンティーナ版ウルガタ

ロベルト・ベラルミーノを中心とする委員会によって校訂がおこなわれ、1592 年に『シクストゥス・クレメンティーナ版』として発表された。この校訂では、ギリシア語聖書、ヘブライ語聖書を参照している。